

**TruPhase の追加導入(8)**  
—バランスアナログアキュライザーの適用(2)—

1. はじめに

前報(7)の結果を受けて、バランスアナログアキュライザーBACU2000 を追加発注しましたので、本格的な運用を開始します。

2. TruPhase の試聴方法

接続は前報(7)の結果により TruPhase2 台を下記のように結線し、再生しています。

**TruPhaseB 入力**

Balance1 入力端子 from EMT981 (バランスアナログアキュライザー)

Balance2 入力端子 from SA11-S2 (SAEC XLR ケーブル)

**TruPhaseB 出力**

Balance 出力端子 to TruPhaseA (XLR リベラメンテ)

以上のとおり、EMT981 の再生経路からは SAEC のケーブルは無くなり、SA11-S2 の再生経路の SAEC のケーブルは 1 本だけになります。

以上の条件で下記の音源を試聴し、TruPhaseB の位相反転を行ってみます。

**DENON COCO-78023**

J.S.バッハ 管弦楽組曲 1 番・2 番 Cantata BWV199

ヘルムート・ヴィンシャーマン指揮ドイツバッハゾリステン

**ARCHIV POCA-7006**

J.S.バッハ 管弦楽組曲 1 番・2 番

カール・リヒター指揮ミュンヘンバッハ管弦楽団

**ARCHIV POCA-3032**

J.S.バッハ Cantata 第 80 番 BWV80

Cantata 第 106 番 BWV106

カール・リヒター指揮ミュンヘンバッハ管弦楽団

**Berlin Classics 030006IBC**

J.S.バッハ 管弦楽組曲 1 番・2 番・3 番・4 番

コンチェルト・ケルン

**harmonia mundi HMX2901634.35**

J.S.バッハ ブランデンブルグ協奏曲 1 番～6 番

ベルリン古楽アカデミー

今回は、並行して次の経路でも再生し、**Brooklyn DAC+**で位相反転を行ってみます。  
**fidataHFAD10-UBX→HFAS1-S10→Brooklyn DAC+**

### 3. TruPhase の試聴結果

**DENON COCO-78023** のバッハの管弦楽組曲は、廉価盤で録音年代などは不明ですが、ヴィンチャーマンの年齢からしてアナログマスター時代のものと思われます。

**EMT981** の再生では、古い録音の焼き直し廉価盤ということで、音質はさほど良くありませんが、バッハの演奏では定評のあるヴィンチャーマン指揮ドイツバッハゾリステンのオーソドックスな演奏が味わえます。

**TruPhase** で位相反転しますと、散漫であった音が凝縮し、楽器の質感が明瞭になります。

**HFAD10-UBX** の再生では、音質はさほど良くありませんが、**EMT981** にくらべると切れ込みのよい音です。

**Brooklyn DAC+**で位相反転しますと、**EMT981** 同様、散漫であった音が凝縮し、楽器の質感が明瞭になります。

**ARCHIV POCA-7006** のバッハの管弦楽組曲は、1960年の録音です。

**EMT981** の再生では、1960年の録音ということで、音質はさほど良くありませんが、バッハの演奏の定番となっているリヒター指揮ミュンヘンバッハ管弦楽団の模範的な演奏が伺えます。

**TruPhase** で位相反転しますと、散漫であった音が凝縮し、ざらつき感が後退して音が澄んできます。

**HFAD10-UBX** の再生では、**EMT981** 同様、リヒター指揮ミュンヘンバッハ管弦楽団の演奏は味わえますが、音のエッジがたってきます。

**Brooklyn DAC+**で位相反転しますと、**EMT981** 同様、散漫であった音が凝縮し、定位がはっきりしてきます。

**ARCHIV POCA-30326** のバッハの Cantata は、1966年、1977年、1978年の録音です。

**EMT981** の再生では、ソリストの歌唱がくっきりと浮かび、勢いのある演奏です。

**TruPhase** で位相反転しますと、合唱の濁りがとれ、音の焦点があってきます。

**HFAD10-UBX** の再生では、**EMT981** 同様、ソリストの歌唱の明晰さや演奏の勢いはありますが、エッジのたった音になります。

**Brooklyn DAC+**で位相反転しますと、合唱の濁りがとれ、音の焦点があって、定位がしっかりしてきます。

**Berlin Classics 030006IBC** のバッハの管弦楽組曲は、2010年の録音です。

**EMT981** の再生では、録音が新しいだけあって、古楽器の繊細な表現が可能になっています。

TruPhase で位相反転しますと、音が散漫になり捉えどころがない演奏のように聴こえてきます。

HFAD10-UBX の再生では、古楽器の繊細な表現は EMT981 と同様ですが、ソフトタッチの EMT981 に比して、音のエッジが立ってきます。

Brooklyn DAC+で位相反転しますと、音が散漫になり、定位が甘くなります。

harmonia mundi HMX2901634.35 のバッハのブランデンブルグ協奏曲は、発売年から想像して 1996 年頃の録音のようです。

EMT981 の再生では、歯切れよく勢いのある演奏です。

TruPhase で位相反転しますと、音が散漫になり、古楽器の質感が後退します。

HFAD10-UBX の再生では、EMT981 と同様、歯切れよく勢いのある演奏ですが、さらに切れ込みがあります。

Brooklyn DAC+で位相反転しますと、音が散漫になり、古楽器の質感が捉えにくくなります。

以上の結果を総合しますと、双方の再生経路の位相反転機器が違っても、アナログマスター時代の CD は位相反転の方が良いという結果ですが、デジタル録音では、その必要はありません。アナログマスター時代の CD は、アナログにくらべてざらつき感があり、デジタルの特性と置いていましたが、幾分かは位相の違いであったかも知れません。

これまでのアナログ出力もデジタル出力もバランス出力しかない EMT981 の再生経路は次のような変遷を辿っています。随分と遠回りしましたが、落ち着くところに落ち着きました。

デジタルバランス出力をコネクタで RCA アンバランスに変え DAC に入力  
デジタルバランス出力を CRV-555 で BNC アンバランスに変え DAC に入力  
アナログバランス出力を SAEC のケーブルで引き出し

アナログバランス出力に TruPhase を介在させ、SAEC のケーブルでバランス入出力

アナログバランス出力に TruPhase を介在させ、XLR リベラメンテとバランスアナログアキュライザー経由でバランス入出力

一方、fidataHFAD10-UBX と HFAS1-S10 による再生は、今回初めてです。

ともにレーベルや録音年代に対応して位相反転を実施し、両者の一致をみました。

#### 4. まとめ

EMT981 の再生で SAEC のバランスケーブルをすべて除き、バランスアナログアキュライザーと XLR リベラメンテだけとする効果を認めました。そしてレーベルや録音年代に対応して選択した位相反転の効果が確認できました。

以上